

# 八重山歴史研究会報

第 52 号

編集・発行 八重山歴史研究会  
発行日 二〇〇八年四月一九日  
事務局・会計 島袋（市史編集課 582-1252）  
題字 坡名城泰雄氏

## 『石垣市史考古ビジュアル版』 シリーズの発刊とその概要

島袋 綾野

はじめに

石垣市史では、平成一八年度から『石垣市史考古ビジュアル版』シリーズの編集・発刊を始めた。考古編全体の計画については、平成一九年度に「石垣市史考古刊行事業費」として位置づけ、石垣市史考古ビジュアル版シリーズ全7巻、本編1巻を予定している。考古ビジュアル版は全7巻のうち編集が進んだものから発刊するため、平成二〇年度は第2巻と第5巻が同時発刊された。今回は、この考古ビジュアル版のシリーズを通して、八重山の考古学研究の概要について紹介したい。

1 「第1巻 研究史 八重山考古学のあゆみ」

第1巻はタイトルのとおり八重山の考古学研究の歴史である。明治期の田代安定、笹森儀助による遺物の報告や、鳥居龍蔵による発掘調査の概要が紹介されている。八重山諸島は地理的な条件から、比較的早く調査がスタートした地域と言える。戦後も、金関丈夫・國分直一らや、早稲田大学学術調査団による発掘調査が実施され、沖縄 八重山が研究者にとって注目すべき土地であったことがうかがい知れる。

ここで確認しなくてはならないのは、一九五九年の早稲田大学の調査時に、すでに、「土器が出土しない遺跡」として、無土器期の存在が示されていたことである。早大調査団が発掘した先史時代の遺跡には、西表島の仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、波照間島の下田原貝塚が含まれている。「土器が出土しない遺跡」は、仲間第一貝塚である。この調査成果を受けて滝口宏は、いわゆる早稲田編年を発表している（一九六

〇年)。早稲田編年では、土器が出土しない遺跡を第一期、土器が出土する遺跡を第二期とし、第三期を原史・歴史時代の遺跡、第四期を近世村落と位置づけた。この考えは、長い間、八重山考古学の定説となっていく。

その早稲田編年に揺らぎが生じたのは、一九七八年に実施された石垣島大田原遺跡・神田貝塚の発掘調査からである。それより先に、金武正紀は、仲間第一貝塚で表面採集した一枚の開元通宝から、「無土器文化はそんなに古くないのではないか」という考えを発表していたが、それはなかなか受け入れられないものであった。しかし、さらに遡れば、八重山考古学にとって初めての考古学編年である多和田編年では、「下田原・仲間第二」を、無土器文化である「仲間第一・西表大原」の両遺跡より古く位置づけいる（一九五六年）。ただし、この考えは早稲田編年の陰に隠れてしまっていた。

話を戻そう。石垣島大田原遺跡と神田貝塚の発掘調査では、37ラインの層序で大田原遺跡と神田貝塚の層が重なる部分が確認された。そこでは、明らかに神田貝塚の層が上位に堆積していたのである。地質学では「地層墨重の法則」という考えが基本となっている。つまり、何らかの攪乱作用が無い限り、地層は下から上に堆積する、という考えである。そこに攪乱がなければ、上位に堆積している神田貝塚の層のほうが、

下位の大田原遺跡の層よりも新しいということが言える。

たった一カ所の例では、まだ皆が半信半疑であった一九八三年（～八五年）、波照間島下田原貝塚と大泊浜貝塚の発掘調査が実施され、そこでも遺物包含層による逆転が確認された。これにより、早稲田編年の逆転は決定的なものとなった。

さらに、理化学年代の値も先後関係を示すものだった。炭化物や貝を利用した放射性炭素年代測定の結果、下田原貝塚や大田原遺跡は約三五〇〇～四〇〇〇年前、大泊浜貝塚や神田貝塚は約一五〇〇～一八〇〇年前という値を示していた。

先島諸島で特徴的に見られる有土器、無土器という国内では例のない先史文化は、こうして定説になっていった。

「第1巻 研究史」では、このような調査の流れを紹介しながら、発掘調査によって何がわかったのかや、考古学の考え方の基本となる資料をイラストなどを交えて紹介している。

2 「第2巻 下田原期のくらし 八重山諸島最古の土器文化」

下田原期というのは、沖縄諸島以北で言う縄文時代の後期から晩期初頭に当たる、八重山独自の先史文化である（約三五〇〇年～四三〇〇年前）。いわゆる新石器を使い、土器を

使用していた。土器は、最初に発掘調査が実施された波照間島下田原貝塚を標式（そこから出土した遺物を、その型式名の基準とするという約束事）として、下田原式土器と名付けられている。当初、下田原式土器には文様がないと思われていたが、フーネ遺跡で爪形文が施された土器が採集され、以後、発掘調査によっても有文資料が見つかった。

現在のところ八重山諸島最古の土器文化である下田原期の人びとがどこからやってきたのか、この問いに明確な答えはまだ無い。周辺地域の発掘調査データを見ても、ズバリ、という類例が発見されていないのである。人骨も見つかっていないことから、DNAなどによるルーツ探しもできていない。では、自主発生した文化なのか、というところを結論づけることも難しい状況にある。今後、さらなる調査研究が進むことによって、解決の糸口がつかめることを期待したい。

さて、四〇〇〇年も前の先史文化というと、どんな生活を想像するだろうか。第2巻の中には、その「くらし」というテーマを盛り込んでいる。

はつきりとした家屋の形態はわかっていないが、竪穴住居や、平地住居のようなものが見られる。また、排水施設のようなものが確認されていることから、過ごしやすくするため簡易な「土木工事」をしていたらしい。また、食料残渣か

ら豊富な海の幸、山の幸を利用していたことがわかっていく（ただし、イモ類などは土に残りにくいことから、発掘調査ではまだ見つかっていない）。特に、イノシシは各島の遺跡で見つかっており、貴重な食料でありながら、さらに骨を使った道具も数多く出土している。先史時代の人びとにとっては肉以外も重要なものだったようだ。

また、石器 特に石斧の石材はトムル層の石が利用されている。トムル層がない波照間島や多良間島でも石材としての利用が確認されており、利用しやすい石を求めて有視界で移動できる島々を廻っていた様子も想像される。

ほかに貝や骨、歯牙を利用したアクセサリーも出土している。特にサメ歯の歯冠部に孔を開けた製品は、下田原貝塚や与那国島トウゲル浜遺跡で多く見つかった。

先に、「下田原期の人びとがどこから来たかわかっていない」と述べたが、第2巻では周辺地域の概要も紹介している。特にこれまでもルーツとして検討されてきた、台湾やオセアニアの例も挙げ、比較できるようにしているのは特徴的だ。

「台湾やオセアニアが「普通」の顔をして登場しているのも八重山ならではの」との感想を、木下尚子先生からいただいた。このような南の地域に新石器時代のルーツを求めることは、沖縄本島以北の地域では考えられない。これがまた、八

重山考古学の特異性でもある。

3 「第5巻 陶磁器から見た交流史」

茶碗や皿、徳利にお猪口……。私たちの生活に、陶磁器は切っても切り離せないものになっている。これらの陶磁器は現在、国産や中国産、ヨーロッパ産にいたるまで、各地域のものが手に入る。

では、「八重山諸島に住んでいた人びとが、最初に陶磁器を使ったのはいつ頃だろう？」という問いの答えが、この第5巻の冒頭である。

現在のところ、発掘調査で見つかっているのは、一世紀後半～一二世紀初頭の中国産白磁(白磁玉縁碗・白磁端反碗)である。これらが、先史時代無土器期の終わり頃から八重山諸島に入る。しかし、遺跡から見つかる量も僅少で、現在見つかっているすべての量を足しても、さほど多くない。しかし、多くないからこそ、貴重な資料である。また、この頃に徳之島で焼かれたカムイヤキと呼ばれる須恵器も、南の波照間島まで出土する。カムイヤキが出土するのは、琉球王国の範囲内に限られているのも特徴的である。

この時期から少しずつ八重山諸島にもたらされた陶磁器が爆発的に増えるのは、一四世紀～一五世紀にかけてである。

この時期には比例するように、八重山諸島では人口が増加したのだろう。遺跡の数もずいぶん増える。集落規模も大きくなり、生活が安定し始めた時期だと考えられる。

さて、じつは同時期の本州の遺跡を見てみると、「普通の集落遺跡」で大量の外來陶磁器が出土するということは滅多にない。これは、琉球列島の遺跡の特徴とも言える。金武正紀は、このように大量に入ってくる陶磁器を、「直接貿易」で入手したものとし、この活動によって富を得た者がいた可能性を指摘している。

しかし、中国側の政策転換や琉球王国が薩摩に侵攻を受け、政治体制の変化を余儀なくされたことなどもあり、一六世紀の後半から一七世紀には中国からの陶磁器は数が減っていく。これは、八重山諸島に限らず、琉球列島全体で見られる傾向である。その代わり、九州肥前の磁器や湧田・壺屋などの陶器が八重山諸島にも流通し、その後、石垣島産の瓦や陶器が焼かれるようになる。

考古遺物の一要素である陶磁器だけを追っても、その出土状況には時代ごとに違いがある。この傾向と、さらに遺構やその他出土遺物から見たその時代、または古文書などに現れるその時代を見つめると、当時の人びとの生活が、よりリアルになってくるだろう。